

04.02.05

修士論文 最終発表

人口還流現象の世代間比較分析

- 淡路島進学高校卒業者にみる還流の実態と可能性 -

慶應義塾大学 政策メディア研究科 GIプログラム

修士課程2年 片桐 暁史 #80231523

発表の流れ

問題意識・研究目的・研究の手法

兵庫県淡路地域の概況

同窓会名簿分析によるUターン動向の概況把握

アンケート・ヒアリング調査

結論

研究の背景・問題意識

研究の背景

中山間地域・・・国土面積の7割
農業生産の4割
若年層流出による過疎・高齢化



人口還流の正確な実態把握は
わが国の地方圏の将来に重要課題

これまでの指摘

若者の帰還意志に対する
地域条件の不整備



若年層の出身地域への帰還の減少

問題意識

果たして、若年層の出身地域への帰還減少は本当か？

それは 他出する者自体が減少したことによる帰還者の減少なのか
他出する者は増加している中での帰還者の減少なのか



構造自体の把握には、世代間で比較分析することが必要。

研究の目的・位置づけ

研究の目的

人口還流現象の実態について
兵庫県淡路島を事例に
世代間で比較分析を行う
ことにより明らかにする。

先行研究

国調・住基では居住経歴が不明
Uターン者の正確な実数把握が
進んでいないのが現状



同窓会名簿分析・アンケート調査
により市町村単位での帰還先特定

兵庫県淡路島の意義

中山間地域の一典型
世代間比較のデータが入手可能
人口移動を左右する様々な要素
大鳴門海峡大橋開通（1985）
阪神淡路大震災（1995）
明石海峡大橋開通（1998） など



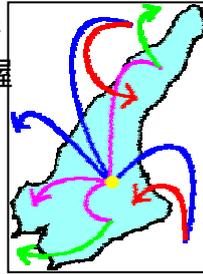
研究の手法

(0) 淡路地域の概況整理

国勢調査、住民基本台帳、事業所・企業統計
現地調査、自治体ヒアリング、既往関連研究サーベイ

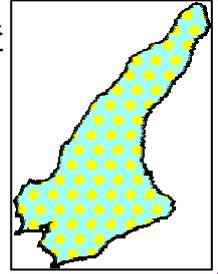
(1) 同窓会名簿分析 Uターン概況把握

コーホート間比較
男女間比較
国勢調査との比較



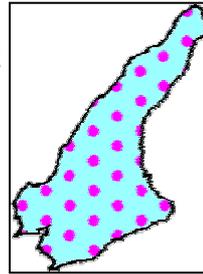
(2) アンケート調査

属性分析
年齢・性別・家族
要因分析
時期・誘引・阻害
今後の意向など



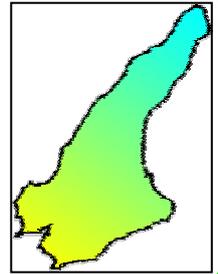
(3) ヒアリング調査

Uターン非実行者
Uターン実行者
島外再移住者
再Uターン実行者

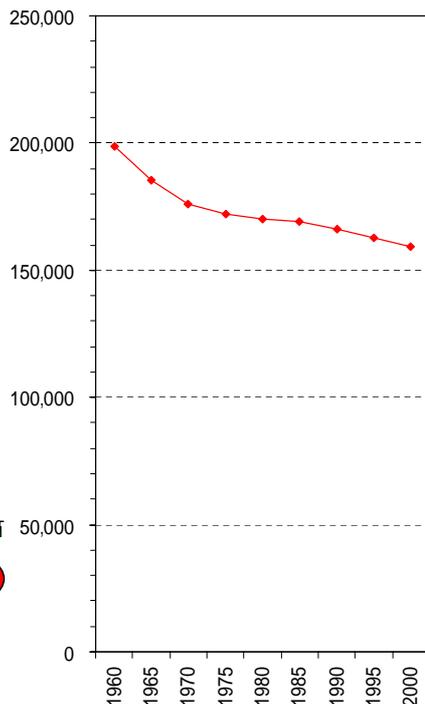


(4) 結論

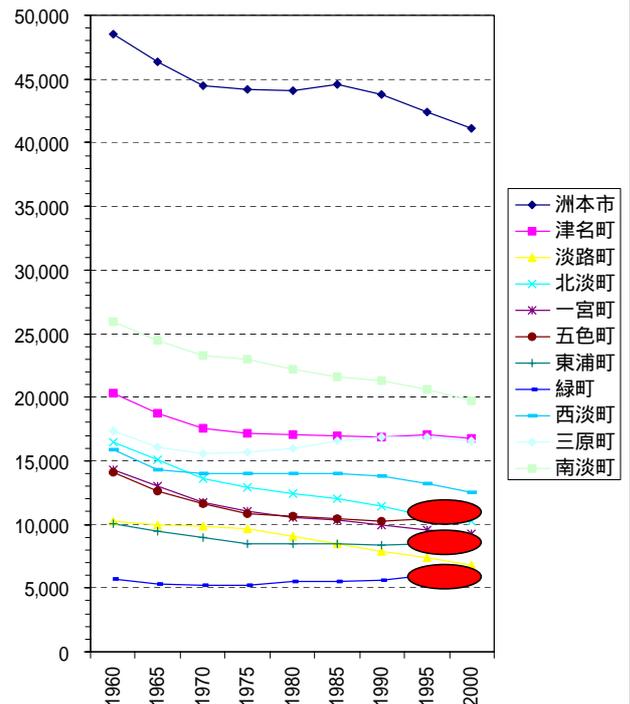
淡路地域の概況
人口還流の実態
人口還流の将来像
地方圏の将来像



人口の推移



淡路地域 全体の人口推移

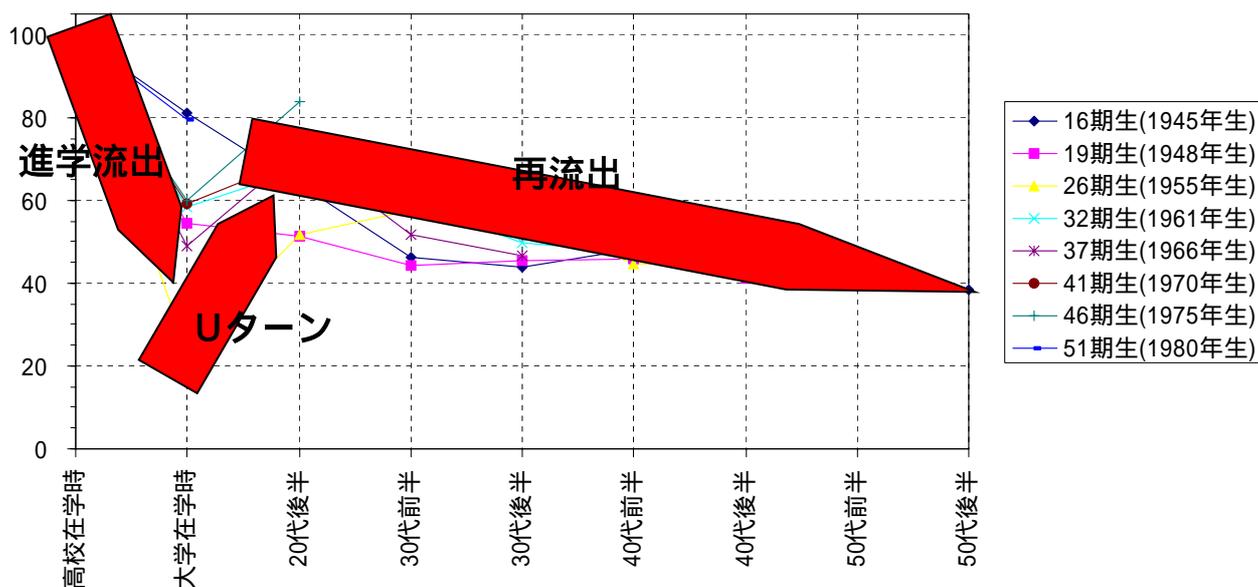


淡路地域 市町別の人口推移



Uターン動向 コーホート間による比較

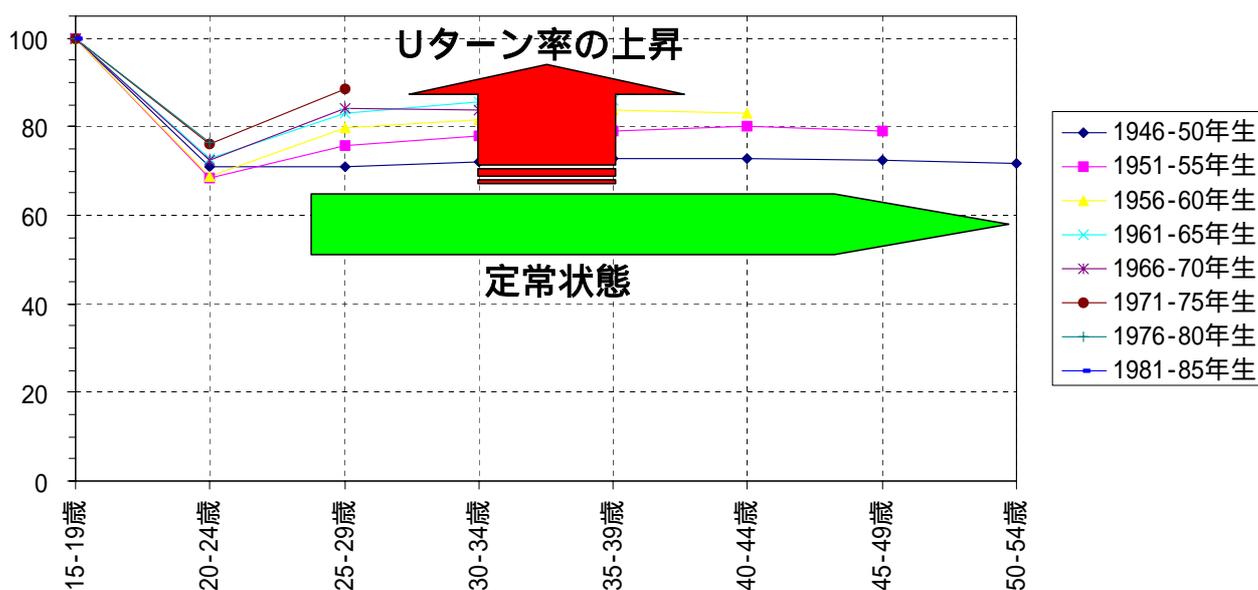
洲本高校卒業生 コーホート間による比較（総数）



進学流出 Uターン 再流出
Uターン傾向の強まりと再流出傾向の強まり 将来的には在住者減少

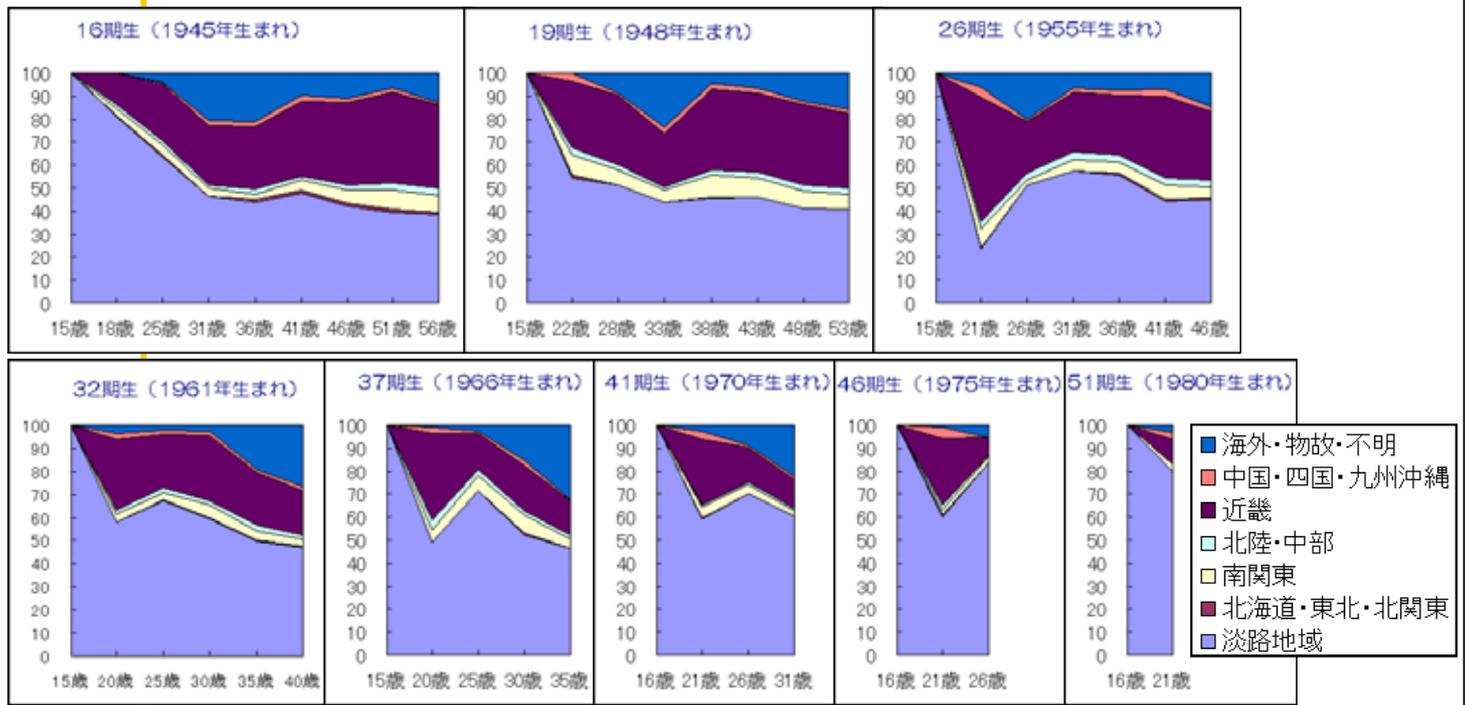
Uターン動向 淡路地域全体との比較

国勢調査による淡路地域全体（総数）



Uターン率の上昇（特に女性） 進学高校卒業生との格差拡大傾向
早い段階での定常状態 進学高校卒業生のUターン後の職のミスマッチ

他地域への流出動向



流出の大部分が近畿圏
 きょうだい数減少、明石海峡大橋開通などから、近畿圏一極集中傾向

同窓会名簿分析によるUターン動向の概況把握

研究目的 淡路の概況 同窓会名簿 アンケート 結論

アンケート調査 目的と対象

アンケート調査の目的

同窓会名簿整理やヒアリングを通じた仮説の検証
 ↓
 進学高校卒業者のUターン後の職のミスマッチ
 ↓
 Uターン移動に対する家族的要因の強まり など
 人口還流の構造・発生メカニズムの解明

アンケート調査の対象・比較法



アンケート・ヒアリング調査

研究目的 淡路の概況 同窓会名簿 アンケート 結論

アンケート調査 質問項目・回収状況

質問項目

- ・基本属性（年齢・性別・きょうだい・学歴・職業・配偶者・家族構成）
 - ・居住地移動経歴（高校在学時～現在）
 - ・Uターン検討・実行の時期と誘引要因・阻害要因
 [職業][家族家産][社会関係][地域風土][淡路地域] 的理由
 - ・再流出検討・実行の時期と誘引要因・阻害要因
 - ・将来の意向（居住地移動・同居者）
- その他

発送・回収状況

2003年11月に実施

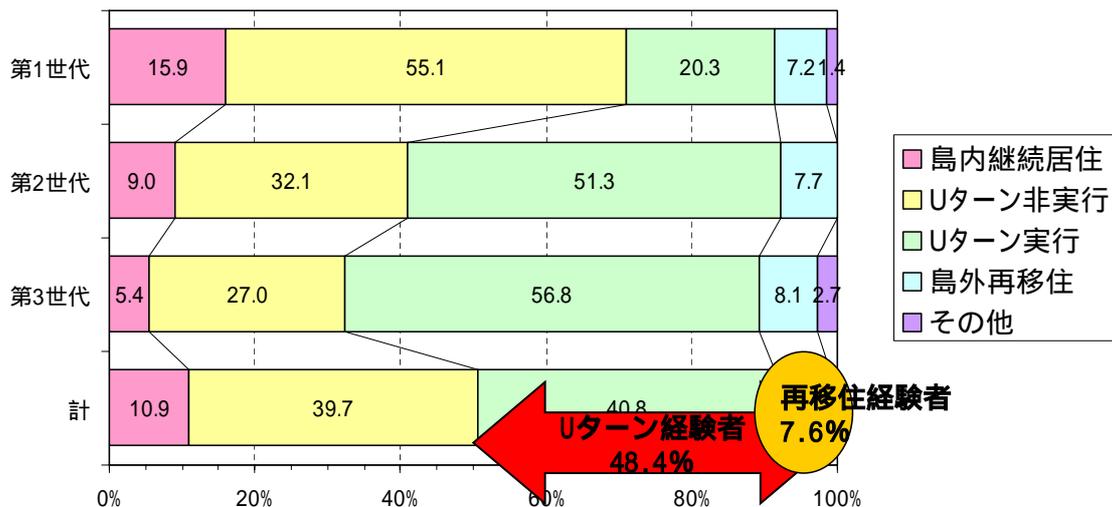
3つの世代に対し、
同窓会名簿表記先へ郵送

発送数 804通
回収数 183通
回収率 22.8%

		淡路島内	淡路島外	計
第1世代	発送数	107	136	243
	回収数 (回収率)	25 (23.4%)	45 (33.1%)	70 (28.8%)
第2世代	発送数	159	138	297
	回収数 (回収率)	47 (29.6%)	29 (21.0%)	76 (25.6%)
第3世代	発送数	215	49	264
	回収数 (回収率)	24 (11.2%)	13 (26.5%)	37 (14.0%)
計	発送数	481	323	804
	回収数 (回収率)	96 (20.0%)	87 (26.9%)	183 (22.8%)

Uターン者の量的把握

回答者の居住地移動パターン

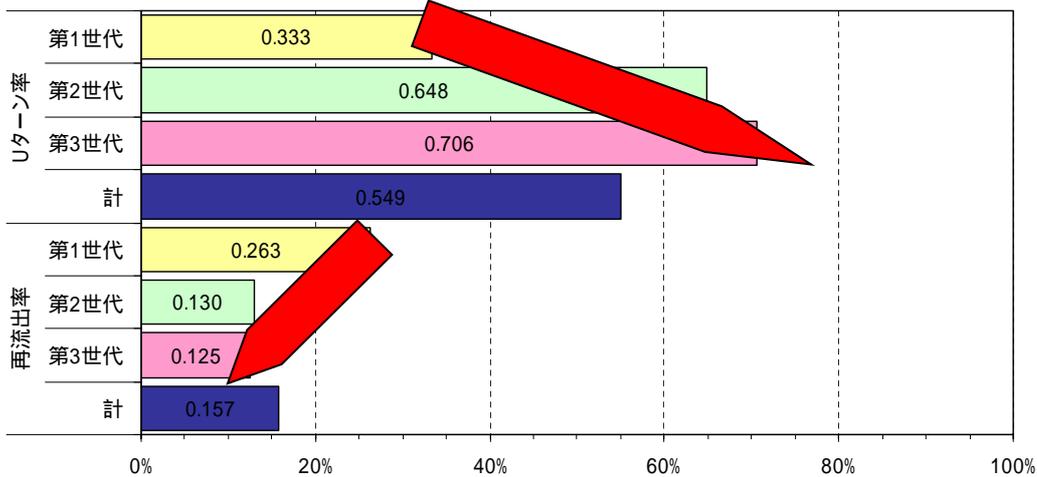


Uターン経験者

	島内継続居住		Uターン非実行		Uターン実行		島外再移住		その他		計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
第1世代	11	15.9%	39	55.1%	14	20.3%	5	7.2%	1	1.4%	69	100%
第2世代	7	9.0%	25	32.1%	40	51.3%	6	7.7%	0	0.0%	78	100%
第3世代	2	5.4%	10	27.0%	21	56.8%	3	8.1%	1	2.7%	37	100%
計	20	10.9%	73	39.7%	75	40.8%	14	7.6%	2	1.1%	184	100%

Uターン率・再流出率

Uターン率・再流出率（世代別）



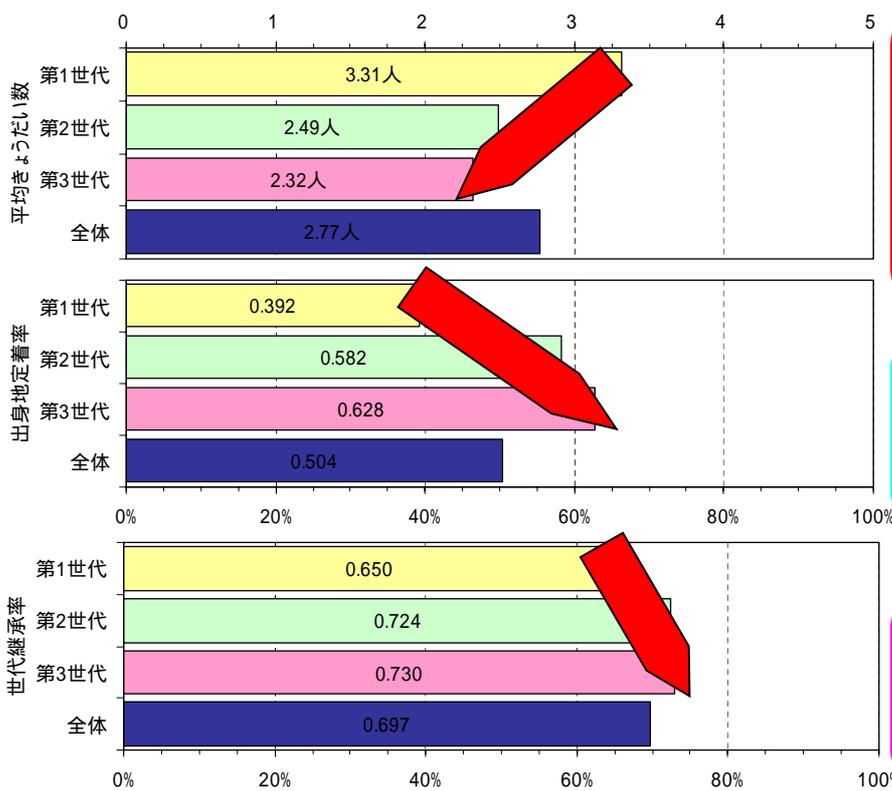
Uターン率 ↑

いったん淡路島外に他出した者のうち、島内にUターンした者の割合

再流出率 ↓

いったん淡路島内にUターンした者のうち、再び島外へ移住した者の割合

出身地定着率・世代継承率



きょうだい数が減少する中において、

世代継承率をも上昇させる規模のUターン率の上昇

同時に、若い世代の再流出に対する潜在性

出身地定着率 ↑

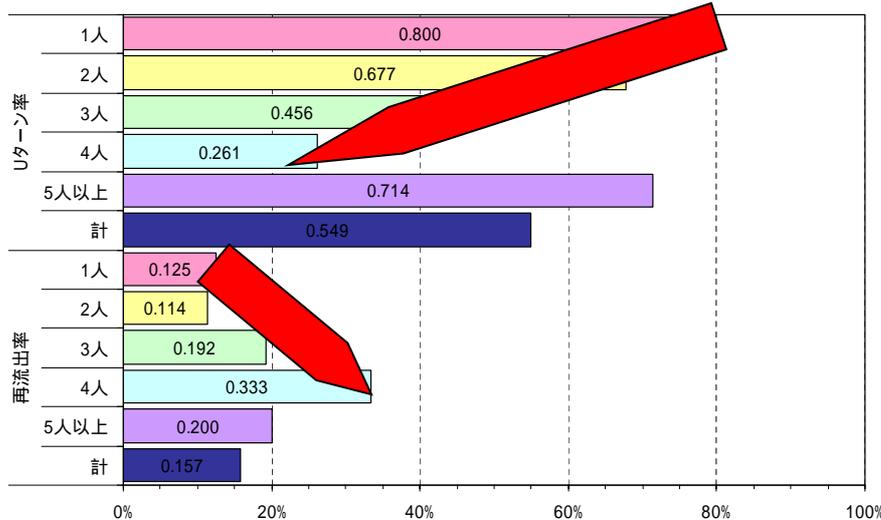
きょうだい全体に占める淡路地域に居住している者の割合

世代継承率 ↑

親1人に対して淡路地域に最終的に居住している子供の人数の割合

Uターン性向と属性 きょうだい数

Uターン率・再流出率（きょうだい数別）

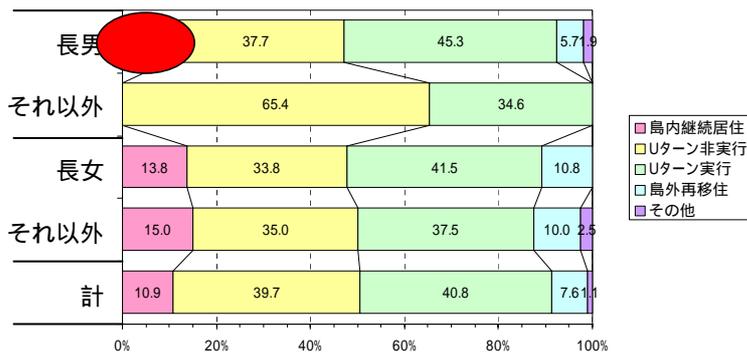


Uターン率・・・きょうだい数が少ないほど高い
再流出率・・・きょうだい数が多いほど高い

「Uターンおよび再流出」と「きょうだい数」との極めて強い相関
若い世代のUターン率上昇には、近年のきょうだい数減少が大きく起因

Uターン性向と属性 きょうだい続柄

居住地移動パターン（きょうだい続柄別）



「長女」と「その他 女性」には大きな差異はなし

「長男」と「その他 男性」に大きな違い

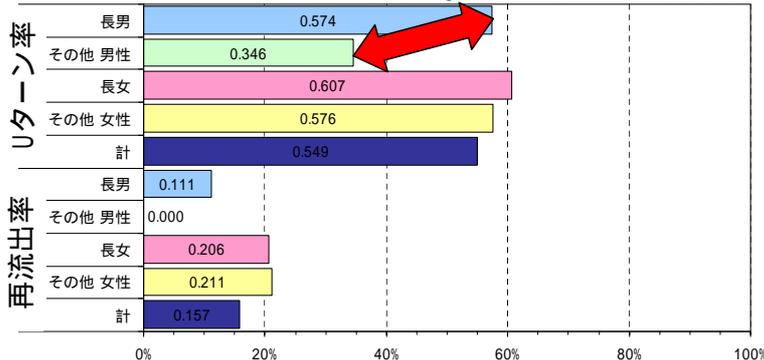
長男

高校卒業後、そもそも島外へ出ない者も多い。

いったん島外へ他出した「長男」も「その他 男性」に比べて圧倒的にUターン率が高い。

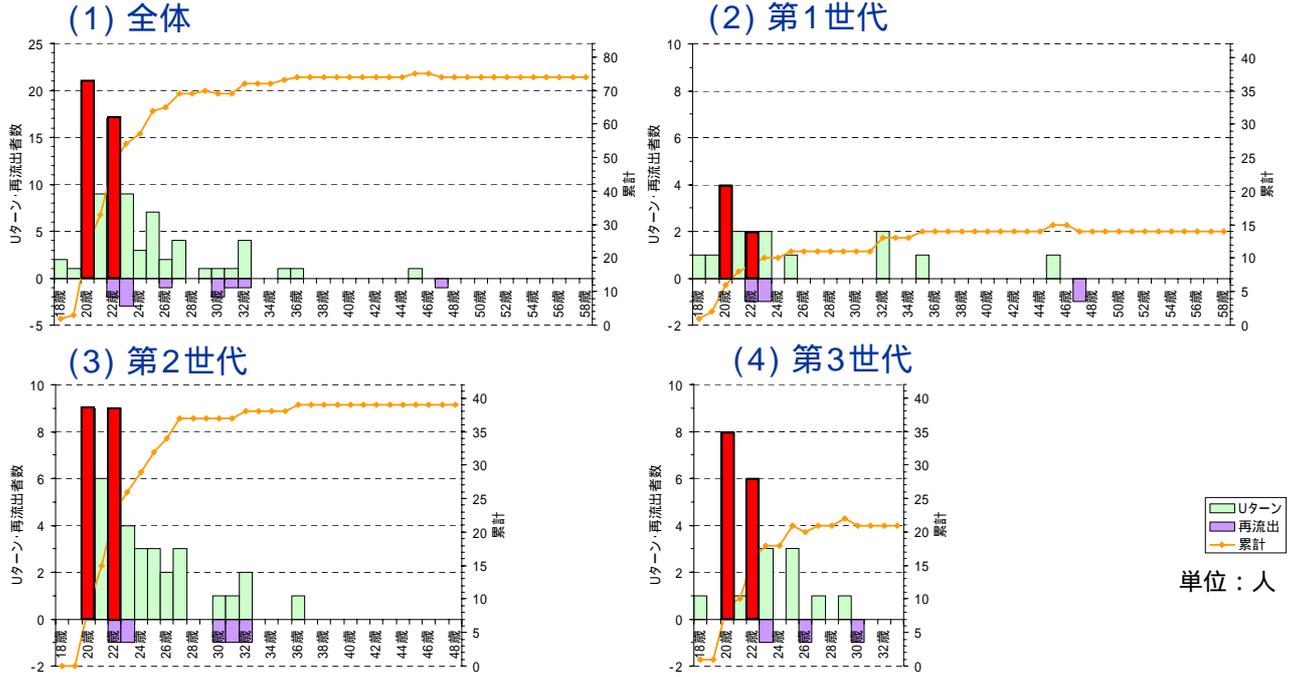
「長男」であるかどうかという家族的要因が、居住地移動を強く規定

Uターン率・再流出率（きょうだい続柄別）



Uターンの発生時期（年齢）

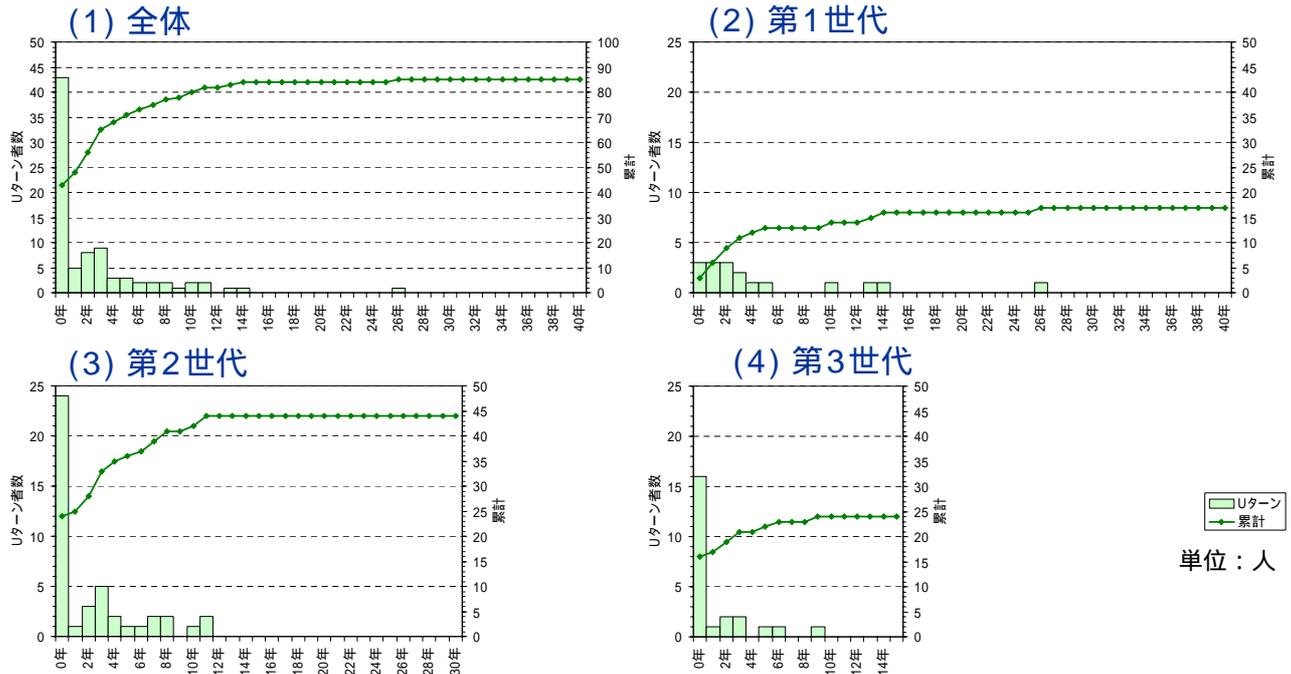
Uターンと再流出の発生時期



各世代ともに、20歳と22歳に大きな山 就職時期との関係
概ね30歳前後の比較的早い段階でUターンを終えている

Uターンの発生時期（就職経年）

就職経年とUターン発生時期



全体の50.6%が新規就職時。就職後は2～3年後に山。10年以内には概ね完了。
第1世代のみ新規就職時のUターンが極めて少ない 都市と地方の就業格差大の時期

Uターンの誘引要因と阻害要因

Uターンの「きっかけ」

	第1世代	第2世代	第3世代	男性	女性	全体	
新規就職	17.6						
転勤		18.6					
転職			20.8	22.2	20.8	21.4	第1位項目
実親の面倒	23.5	18.6	20.8		20.8		第2位項目
家業・家産の継承	23.5	18.6	16.7			19.0	第3位項目
温暖・豊かな自然環境	23.5	23.3	25.0	19.4		23.8	
のんびりとした土地柄、都会のせわしさへの嫌気	23.5	20.9		22.2		25.0	
淡路島への愛着、住み慣れた土地での生活				25.0			

第1世代・・・いったん島外で就職した者の「親の面倒」「転職」を機としたUターン
 第2第3世代・・・「新規就職」、最近では「地域への愛着」も上昇
 男性・・・家族・家産的要因、職業的要因 女性・・・地域風土的要因

Uターンの「差し障り」

	第1世代	第2世代	第3世代	男性	女性	全体
自分にあった職種の不足						
収入の低下						15.5
これまで築いた会社や地域での人間関係を維持しなかった						
華やかで便利な都会生活						
当時の居住地への愛着	23.5					

全てにとって「職種の不足」「華やか便利な都会生活」がUターンの大きなネック
 島外でのライフステージ進行・家族形成に伴う、Uターン障害の複雑・巨大化

Uターン実行者の生活満足

Uターン実行者の満足

	第1世代	第2世代	第3世代	男性	女性	全体
やりたい仕事ができる	30.8	21.6		21.9		
親の面倒がみられる						
子供の教育環境が豊か、のびやか	53.8	27.0		40.6	20.5	29.6
子供の頃からの友人や親戚が多い	46.2	32.4		43.8	35.9	39.4
地域社会での人々の暖かいつながら		35.1	38.1		28.2	40.8
温暖・豊かな自然環境			33.3	46.9		
のんびりとした土地柄	38.5					

上位は「親の面倒がみられる」「温暖・豊かな自然環境」「のんびりとした土地柄」
 「やりたい仕事ができる」「子供の教育環境が豊か」が近年減少傾向

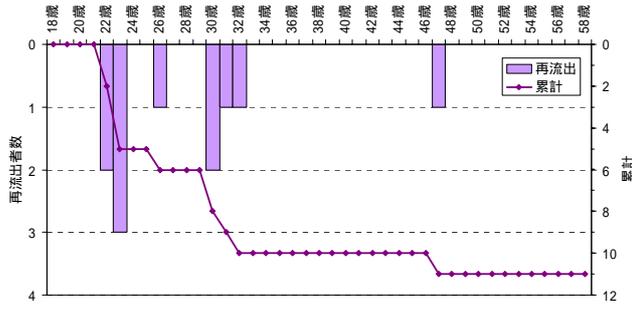
Uターン実行者の不満

	第1世代	第2世代	第3世代	男性	女性	全体
やりたい仕事ができない	15.4					18.6
収入の低下				15.6		
農地や山林等を守っていくのが大変		16.7		21.9		
都市に比べて生活に面白さや楽しさがない						
日常生活が都市に比べて不便						
物価が高い 又は 不安定である	23.1			21.9		15.7

上位は「都市に比べて生活に面白さや楽しさがない、不便」
 若い世代ほど「やりたい仕事ができない」（男性では4人に1人）

Uターン実行後の再流出

再流出の発生時期



3世代全体で、
Uターン実行後の再流出率は15.7%
島外再流出は様々な時期に分散

再流出の「きっかけ」

	男性	女性	全体
淡路島での職の不足、職のミスマッチ	●	●	17.6
転勤	●	●	11.8
配偶者の仕事の都合	●	●	
結婚	●	●	
地域社会・近所づきあいに溶け込めなかった	●	●	
淡路島の気候など風土が自分に合わなかった	●	●	
淡路島の不便さ、華やかで便利な都会生活	●	●	
新しい地域への好奇心	●	●	

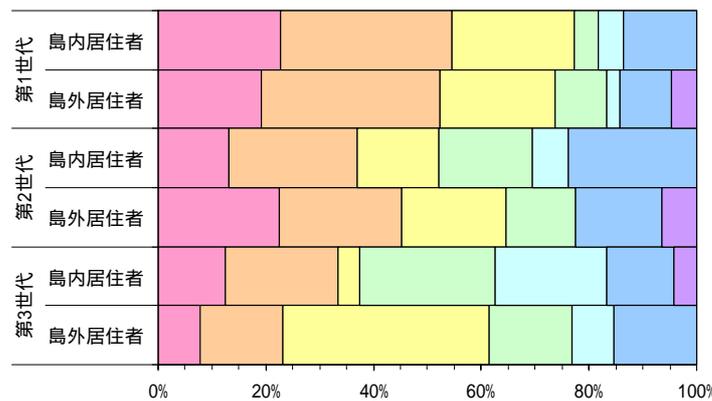
男性「転勤」
「職のミスマッチ」
女性「結婚」
「配偶者の仕事の都合」
「都会に比した不便さ」
が後押し

再流出の「差し障り」

	男性	女性	全体
淡路島での職を続けたかった	●	●	
配偶者の仕事の都合	●	●	
島内に住む親の面倒がみられなくなる	●	●	
島内で家業・家産を継承できなくなる	●	●	
淡路島の豊かな自然環境	●	●	

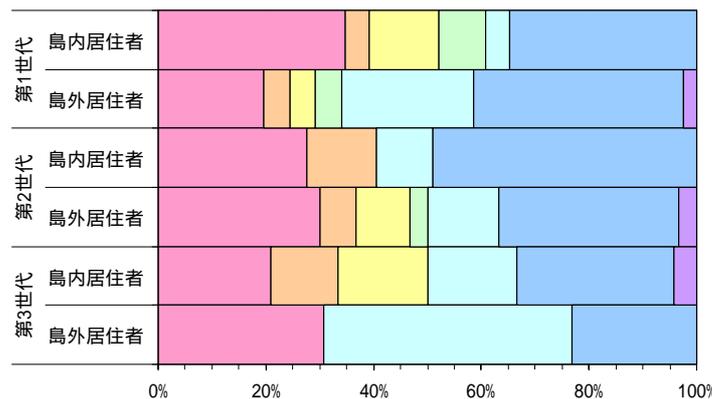
「親の面倒がみられなくなる」
男性
「家業・家産が継承できない」
女性
「島内での職を続けたかった」

地方圏出身者の将来意向 (親子の居住関係)



親の健康不安時

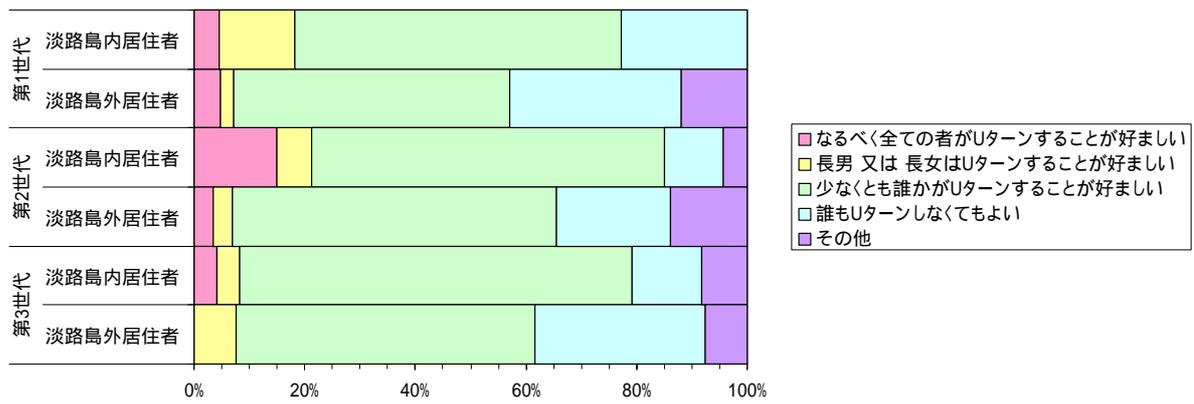
若い世代ほど
同居・近居を希望
第1世代 65.6%
第2世代 50.7%
第3世代 73.0%



自身の健康不安時

若い世代ほど
同居・近居を希望
第1世代 35.9%
第2世代 27.3%
第3世代 45.9%

地方圏出身者の意識（きょうだいとUターン）



「きょうだいのうち、誰もUターンをしなくてもよい」
減少傾向（第1世代 28.1% 第2世代 15.1% 第3世代 18.9%）

「長男がUターンをすればよい」「誰もUターンしなくてもよい」から
「少なくとも誰かがUターンしなければならない」
「なるべく全ての者がUターンすることが好ましい」へ変化

極めて家族的な要素（「親子関係」「きょうだいとUターン」）によるUターン志向の強まりが、若い世代のUターン率を上昇させている。

人口還流現象の将来像

これまでの指摘との比較

これまでの多くの指摘
「若年層の出身地への帰還が減少」

↓

本研究
Uターン率は一貫して上昇。
きょうだい数が減少する中において、
世代継承率をも上昇させるほどの規模

Uターン率上昇の背景

都市と地方との就業格差縮小、
最低レベルでの受け皿の確保。

きょうだい数の減少、
長男の割合増加、
「跡を継がなければならない者」増加
「家族の紐帯」の強まり

人口還流の将来像

強い「家族規範」が揺るがない限り、
最低レベルでの雇用が確保されている
現在、今後の若い世代たちにも一定
規模のUターン者が見込まれる。

人口還流現象は、
強く懸念される現象ではなくなる。
新たな時代を迎えている。

今後の新たな視点

(1) 再流出現象
強い家族規範のもとにUターンを実行
した者の、その後の不満・再流出。

(2) 高齢期の移動
団塊世代が高齢期に差し掛かる。
モビリティの高まる高齢期の移動。

高齡期の移動

五色町の“介護移住”

充実した福祉サービスによる島外高齡層の移住“介護移住”
町全体の人口動態を左右するほどのインパクトを持つまでに

津名町の“リタイアメントビレッジ構想”

2004.03 ~ 1,300人が暮らす「高齡者のまち」
豊かな自然環境・温暖な気候の中で、同時に大都市の利便性

もともとの風土を活かし

島外高齡層の大量流入

高齡層の能力の活用

若者の雇用創出

看護系大学の創設

